慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生活時間・ 時間意識をめぐる子どもの語りと社会階層の関連
Sub Title	
Author	大久保, 心(Ōkubo, Shin)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2023
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.94 (2023.) ,p.[99]- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2021年度博士課程研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000094-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2021年度
博士課程学生研究支援プログラム
研究成果報告

生活時間・時間意識をめぐる子どもの語りと社会階層の関連

大久保心

1. 問題の所在

本研究の目的は，子どもの生活時間・時間意識と出身階層との関連を検討することにある。

従来の社会学における生活時間研究は，子どもの出身階層が学習時間（Hertog and Zhou 2021; Matsuoka 2017など）やTVやゲームといったスクリーンメディア時間（Gracia et al. 2020; Mullan 2019など）に影響することを明らかにしてきた。また，そうした生活時間が学力や学業成績に影響することもわかっている（数実2019; Nakamura et al. 2020; 中西2017; 須藤2013）。しかし，子ども自身が自分の生活時間をどのように捉え，どのような時間意識を持って過ごしているかについて，具体的なことはあまり明らかにされていない。そこで，本研究では，子ども自身の具体的な生活時間と時間意識に注目し，子どものライフスタイルと出身世帯の関連について，事例調査を中心に検討する。

2. 方法

本研究は，本来であれば中高生を対象としたオンライン調査を行う予定で，対象者選定については2019年度まで研究代表者が行っていた就学前施設（XおよびY）の責任者によって，卒園児への協力依頼という形で行われる予定であった。感染対策や日程調整の都合により，最終的に辞退となった。代替として，本研究の研究目的に関連して，10歳以上の子どもの生活時間の趨勢について「国民生活時間調査」（NHK放送文化研究所）（以下「NHK調査」）を用いて50年間の動向を確認した。子どもの生活時間の趨勢から，子どものライフスタイルの動向を客観的に確認できるだけでなく，子どもと社会の関連について時代を通じた変化と安定の傾向を知ることができる（Mullan 2020: 5）。

そのうえで，本研究の予備調査として2018年12月に行っていた中高生5名（Yの卒園児調査）とその保護者への質問紙調査および中高生への聞き取り調査のデータを用いた事例分析を行った。そこで，収集された調査対象者の基本的な情報や，親の社会経済的地位，子どもの成績や進学期待などの情報を表1および表2にまとめている。全3世帯の情報ということになるが，いずれの親も非大卒であり，トモミとアケミはひとり親世帯である。また，橋本（2006: 37–8）の職業的地位を基盤とする階級概念と照らし合わせると，テツとマコトの父親は労働者階級，マイの父親は新中間階級，そしてトモミとアケミの母親は旧中間階級に該当する。さらに，テツとマコトの世帯の経済的ゆとりはあまりないが，マイやトモミ，アケミの世帯の経済的ゆとりはわりとあるほうだ。つまり，本研究は，親学歴が類似している一方で，階級や経済状況は異なる子どもたちを扱っていることになる。なお，対象者とその親の進学期待もほとんど一致しており，親の高い期待に反する子の低い期待，あるいはその逆といったケースは見られない。

表1　調査対象者の世帯情報

名前（仮名）	学年	性別	きょうだい数	父学歴	母学歴	父職	母職	暮らし向き（4段階）	親の子への進学期待
テツ	中1	男	3	中卒	高卒	中小・ブルー	専門	あまりゆとりなし	無回答
マコト	中3	男							無回答
マイ	中2	女	3	高卒	高卒	中小・管理	中小・ブルー	多少ゆとりあり	四年制大学
トモミ	高1	女	2	―	高卒	―	自営・管理	多少ゆとりあり	四年制大学
アケミ	高3	女							専門学校

表2　調査対象者本人の情報

名前（仮名）	学年	性別	きょうだい数	習い事	塾 家庭教師	部活動	家の蔵書数	美術館・博物館に行く頻度	中学の成績（5段階）	進学期待
テツ	中1	男	3			✓	11～25冊	ほとんどなし	4	不明
マコト	中3	男					0～10冊	ほとんどなし	1	高校
マイ	中2	女	3	✓	✓	✓	26～100冊	ほとんどなし	4	四年制大学
トモミ	高1	女	2		✓	✓	0～10冊	ほとんどなし	4	四年制大学
アケミ	高3	女					26～100冊	ほとんどなし	3	専門学校

3.　結果

3.1.「国民生活時間調査」集計データの分析結果

小中高生の生活時間に関する長期的趨勢の分析結果から，学校完全週五日制への移行後，週あたりの子どもの自由行動の時間がむしろ減少していたこともわかり，2020年現在の子どもたちは，少なくとも3,40年前と比べてやたらと暇になったわけでも多忙になったわけでもないようだ。また，週あたりの拘束行動の増加は，どうにかして自由行動の時間を確保しようとする子どもたちにおいて，夜遅くの自由行動の増加をもたらしている可能性があると言えるのではないだろうか。それは，平日の日中の自由時間不足を少しでも補おうとするための動きとしても捉えられる。ここに，平日の子どもの生活時間における，自由時間の希少性が垣間見える。なお，詳細な分析結果および図表は大久保（2021）を参照されたい。

3.2.　事例データの分析結果

対象者には，聞き取り調査の前に，普段の平日と休日の時間の使い方について，生活時間を記録する用紙に記録してもらっており，その結果が図1と図2である。ここでは紙幅の制限のため，聞き取りデータと生活時間情報との関連を要約して記述する。

テツ・マコトの事例：中1のテツと中3のマコトはきょうだいだが学習姿勢や成績は異なる。兄のマコトの学業成績は著しく悪く，しかも彼は学校以外で学習に取り組むことはほとんどない。また，自宅では一人で過ごすことが多いようで，もっぱら漫画『ワンピース』を繰り返し読んでいるそうだ。それに対し，弟のテツは，勉強好きではないものの，高校入試やそれ以降の将来のためにある程度勉強をする重要性を感じているため，必要最低限の学習には意欲的で，学業成績も良好だ。一方，テツは兄以上にスクリーンメディアの使用時間が多く，特に平日は宿題が終われば就寝まではゲームかテレビに費やしている。マコトは，スクリーンメディア以外の娯楽に多くの時間を割いていることから，きょうだい間で自由時間の量が類似していても，その使い方は質的に大きく異なる。しかし，テツもマコトもゲーム時間は長めであり，かつかなりの夜型である点は共通しており，その反動が休日の起床時刻に表れている。また，二人ともさらに自由な時間が欲しいと不満げに語っている。

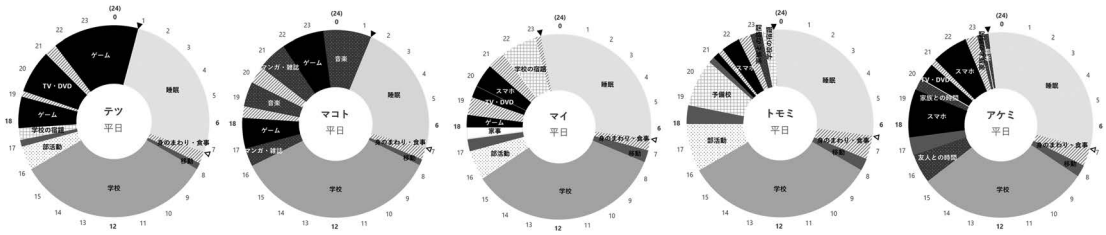

図1　対象者の通常の平日の生活時間

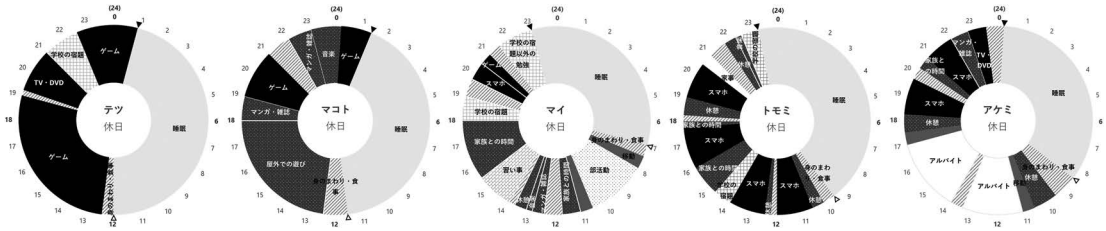

図2　対象者の通常の休日の生活時間

マイの事例：中2のマイの生活時間については，テツやマコトと比べて自由時間の量が少なく，休日も部活動や習い事といった拘束時間が少なくない。しかし，平日でも休日でも一定のスクリーンメディアや漫画などの時間を設けており，かつ学習時間もそれほど長いわけでもない。彼女は学業成績も良く，地元の国立大学への進学を希望しており，すでに興味のある分野も考えつつあることから，学習意欲も比較的高い。彼女は，テツやマコトと同様に「もっと自由時間が欲しい」とも語っていたが，それは部活動や習い事，学校外学習を両立している現状への満足感と同時に生じる無い物ねだりに近い願望ではあれども，不満ではないようだった。その点で，マイは学校文化にかなり親和的なライフスタイルを送っており，就寝も遅すぎず，しかも平日と休日の起床時刻のギャップはほとんどない。

トモミとアケミの事例：高1のトモミと高3のアケミも，テツとマコトのきょうだい間と同じく学習姿勢や成績は異なる。姉のアケミは卒業後に専門学校に進学することが決まっており，調査時点での学校関連の学習行動は見られないが，それ以前も学校の宿題に限って必要最小限の学習時間を確保するだけだったという。また，スクリーンメディアの時間も多く，生活時間をめぐる不満感はあまり見られない。一方，地元トップ校に通う妹のトモミは，地元の国立大学医学部への進学期待を持っており，学校外学習の重要性を強く感じている。また，平日では，予備校を利用しながら学校外学習時間を多く確保するなかで，学校の課題の多さに辟易するとともに時間的圧迫感も強く，姉との差異が際立つ。しかし，休日では，学校の宿題をはさみつつ，平日の姉と同じようにスマートフォンに興じる時間を多く設けており，平日のストレス発散ともなっている。さらに，テツとマコトと同様に，平日と休日の起床時刻のギャップはそれなりに大きい。ただし，トモミとアケミの二人とも，平日では日付を越える前に就

寝しており，普段の睡眠習慣は似通っている。また，スマートフォンが娯楽の中心となっている点も類似している。

4. 結論

本研究の事例調査の対象となったいずれの世帯の親は，自分よりも低い学歴になってほしくはないと回答していたものの，子どもの進学期待や日々の学習を積極的にコントロールする様子は見られず[1)]，学習習慣については子どもの自己管理の役割が大きいようだった。この点では，非大卒層に生じやすいとされる放任型の子育てスタイルの「自然的養育」[2)]（Lareau [2003］2011; 松岡2019）を表しているとも考えられる。しかし，同じきょうだいでも学習姿勢や進学意識には差があり，それは生活時間における学校外学習時間の確保に差をもたらしている。したがって，Lareau（2000, 2002, [2003］2011）が指摘したような階層間・階級間で生じる子どものライフスタイルの差異は重要だろうが，本研究からは，階層内・階級内あるいは世帯内での子どものライフスタイルの差異に着目する重要性も示唆される。ところが，自由時間の量的な確保についてはきょうだい間で類似しており，平日に確保できない場合は休日で確保するといった調整が見られた。そして，3.1.節のNHK調査の分析結果と同様に，夜の時間帯にどうにかして娯楽時間を確保しようとする傾向も見られた。また，生活時間におけるメリハリの有無が，子どもの時間的な不満感や圧迫感を生じさせている可能性が示唆され，単に自由時間が長いことが満足感をもたらすわけでもないのかもしれない。こうしたことが非大卒層の世帯で同様に確認されるか，そして大卒層の世帯でどのような傾向が見られるかを，今後明らかにしていく必要がある。

本研究の限界として，扱ったケースの少なさとワンショットの調査であることが挙げられる。前者については今後の追加調査によって補うことが期待される。一方で，後者については，長期的な追跡調査が必要であるが，調査時から約4年もの期間が経過した本研究の調査対象において，再調査が本研究の目的に果たして貢献するかには疑問が生じる。むしろ，新たな対象者に対して縦断的な調査を行うことが適切だと思われる。また，研究結果を総合すると，同じ出身世帯であるきょうだい間でも，学習習慣，進学意識などに小さくない差異があることがわかった一方で，時間意識や睡眠習慣，自由時間の量などでは類似点も目立っていた。したがって，今後，教育格差研究において，生活時間や時間意識に関する情報を豊富に含み，かつ未成年のきょうだい全員の情報を含む大規模な質問紙調査の実施が望まれる。

謝辞

事例調査に協力してくださった方々に深く御礼申し上げます。

注

1) マイには高校生の兄と未就学児の弟がいるが，親の子どもへの進学期待について，兄や弟は「高校まで」と回答している。つまり，親のマイへの進学期待が「四年制大学まで」となっているのは，マイ自身の進学期待が高いことによるのであり，子どもに無条件に高学歴を期待するからではない。したがって，マイの親は，子どもの大学進学を当然視するのではなく，子どもの学習習慣や学業への適性を参照しながら，子どもへの進学期待を形成していると考えられる。こうした傾向は，調査対象の他の2世帯の親にも当てはまっていた。

2) これに対し，大卒層に生じやすい子育てスタイルは，介入型の「意図的養育」（Lareau [2003］2011; 松岡2019）として論じられている。

参考文献

Gracia, P., Garcia-Roman, J., Oinas, T. and Anttila, T., 2020, "Child and Adolescent Time Use: A Cross-National Study," *Journal of Marriage and Family*, 82(4): 1304–25.

橋本健二，2006,『階級社会――現代日本の格差を問う』．講談社

Hertog, E. and Zhou, M., 2021, "Japanese Adolescents' Time Use: The Role of Household Income and Parental Education," *Demographic Research*, 44: 225–38.

数実浩佑，2019,「学業成績の低下が学習時間の変化に与える影響とその階層差――変化の方向を区別したパネルデータ分析を用いて」『理論と方法』34(2): 220–34.

Lareau, A., 2000, "Social Class and the Daily Lives of Children: A Study from the United States," *Childhood*, 7(2): 155–71.

――――, 2002, "Invisible Inequality: Social Class and Childrearing in Black Families and White Families," *American Sociological Review*, 67(5): 747–76.

――――, [2003] 2011, *Unequal Childhood: Class, Race, and Family Life*, 2nd ed., University of California Press.

Matsuoka, R., 2017, "Inequality of Effort in an Egalitarian Education System," *Asia Pacific Education Review*, 18(3): 347–59.

松岡亮二，2019,『教育格差――階層・地域・学歴』筑摩書房.

Mullan, K., 2019, "A Child's Day: Trends in Time Use in the UK from 1975 to 2015," *The British Journal of Sociology*, 70(3): 997–1024.

――――, 2020, *A Child's Day: A Comprehensive Analysis of Change in Children's Time Use in the UK*, Bristol University Press.

Nakamura, R., Yamashita, J., Akabayashi, H., Tamura, T. and Zhou, Y., 2020, "A Comparative Analysis of Children's Time Use and Educational Achievement: Assessing Evidence from China, Japan and the United States," *Chinese Journal of Sociology*, 6(2): 257–85.

中西啓喜，2017,『学力格差拡大の社会学的研究――小中学生への追跡的学力調査結果が示すもの』東信堂.

大久保心，2021,「子どもの生活時間の趨勢（1970–2020）」『時間学研究』12: 31–51.

須藤康介，2013,『学校の教育効果と階層――中学生の理数系学力の計量分析』東洋館出版社.